

ご主人様の

墮としごと

寝取られ
さいみんれ

今日もいっぱい
中出しちんぽ汁♥

生ハメセックス
お願いします♥

R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止



外廷勤めになって
しばらくしてから

いい出来だ
猫猫

とある役人の男に
薬の調合を
頼まれた

家に伝わる
秘薬というから
どんなものかと楽しみに
していたんだが...

前にも忠告しましたが
それに人を操るような
効果はありません

言われた通りに
数を揃えました
催眠薬なんて都合の
良いものは存在しないかと

クク...
存在しないか
その認識でいい

あ...
♡

催眠なんて
存在しない♡

礼はいつものように
ちゃんぽでの
まんこほじりで
いいな？

できれば
中出しも
おねがいひまふ♡

ガオユウ♡

猫猫
お前にかかってる
暗示を言ってる

ちんぽでイクほろ
そのちんぽが
好きになりゅ♡

セックスが
何より
大好き♡

〇〇様の
ことは秘密♡

〇〇ひゃまの
言うころには
全部従う♡

オ
オ
オ

オ
オ
オ

オ
オ
オ

オ
オ
オ



催眠薬に
ついては!!

しゃ♥さいみん
導入効果♥

撮取した後
特定の声色とリズムで
暗示をかけましゅ♥

ほい

んんんん
もろ

次!!

常用効果♥

やがて薬なひれも
刷り込まれた声れ
暗示にかかるとように
なりましゅ♥

んんんん

んんんん

最後!!

〇〇様の許可なしに
薬の本当の効果あ♡

催眠については
話せないし
認識れきまへん♡

よし
良くできた
ちんぽ汁だ

中でイケッ

おっぱい
ちんぽ汁
おっぱい

ほ♡
ちんぽ汁
おっぱい

お♡





私たちが皆
○○様の
ちんぽが大好き♡

翡翠宮では
おちんぽに
奉仕するのは
自然♡♡♡

いいぞ
順調だ
よくやった
猫猫

では
ご褒美汁を
お願いしまふ♡

よし
舌だせ

ここの牝ども全員
俺に無条件で
従う催眠メス豚に
しつける

あっ♡

ドカ



ぬげ

はい♡

猫猫♪
素敵なる方を
紹介してくれて
ありがとう♡

鈴麗は
任せたわね♪

ここでの俺の立場は
ちんぽ講師

主上とのマンネリ防止
玉葉様に
特別スケベ指導をする
という設定だw

分かりました

ほおっ♡
ちんぽでかっ

アハハハ

公主
ご本を読みましょう

いいぞ
もっとリズムを
つけろ



講師さまの
デカ雄ちゃんほ
素敵です♡

ちゃんほ
うっま♡

んほいっ♡

んほいっ♡

VONDO♡



まあまあ
紅娘さまも
しゃぶりますか？

しゃぶり
ますひゅ♡

ちよあ♡



講師さまは
玉葉様のために
来ていただいた方で
あなた達の…

もうまた

グワッ♡

んほいっ♡

んほいっ♡



今日もすごかった
です講師さまあ♡

はぁ♡
はぁ♡

↑ギョ

♡
♡
♡

↑ギョ



おひんぽあ

おひんぽあ

ひんぽあ

これなら進めても
問題ないな...



…はい♡
なんなりと

玉葉
今日はお前に
新しい命令を
与える

キミを

ちんぽ

ア

アッ



グッ

んもっ♡

んもっ♡



これだ
お前も
大好きな薬

♡

ぴちゅ♡



同じように主上に
のませろ

そして俺が
奴に催眠をかける



はわたしは……



い……や

これで

この国は
俺の……



まさか

主上…

抵抗するだと

主上にそんな…
ことは…



どうされたのですか
玉葉さま?
ご命令ですよ

れめい…?
れめい…?

ちが…う
こんなこと…

まずい
自力で
催眠を!!

なら

正氣に戻れ
玉葉!!



絶対に許さないから



きもちいいくやしーっ♡
ちゃんぽおおお

8回目だなw

ビクッ

ガッ





9回 W

お前が勝てたら
全員自由
俺は死罪だろうな



分かって...おっ♡
動かないれ
まだイッれる
途中...♡

クク...
ハンデだ
お前は30回に
してやるよ W

分かってるのか W
先に10回イッたほうが
負けだぞ
俺はまだ2回...

墮落した体から心をへし折る
誰がお前の本当の主人か
わからせてやる



10回

ダメっ♡ケツっ♡
ずるい♡♡
ケツ穴反則っ♡おっ♡

だが負ければ
俺のことを誰よりも
愛するようになる
催眠をかけた
主上よりも
鈴麗よりもだ

11回 W

手お♡おん♡
♡♡♡
♡♡♡

ダメ
この絶倫ちゃんぽに
私の体♥堕ちてる♥

おれんじがき

いつのとまらない♥

18

ビクッ

大丈夫
大丈夫よ♥

23

おれんじがき

おれんじがき

ふーっ♥
ふーっ♥
キス♥きしゅも…
イクうう♥

負けても
こんなおちゃんぽだけの
男のこと本当に
好きになるわけない♥

イキ癖
ついてんぞW

24

おれんじがき

おれんじがき



ちんぽにくるよう
スケベで下品に
仕立ててみました♡

では……♡
主上

ふふ♡

なるほど
よく似合っている



……うむ

ん♡

ん♡



ん♡

ん♡



今日もそこで
粗末なちゃんぼ握って
見ていてくださいね♥

私とご主人様の
ラブラブ子作り
エッチ♥



くく…
意地が悪いな
玉葉は

はあ♥もう
でっか…♥

んも♥
オスの格の違いも
しっかり刷り込まないと
いけまへんから♥

クッ

わんぽ
ちんぽ

ほっほっほ

浮気ドスケベまんこに
最強ちんぽ
後ろからパンパン
お願いします♥

ちんぽ

ほんぽ

んへっ♥
例え催眠が
とけたとしても

オスとして絶対に下
逆らえないと本能に
わからせるの♥

おんぽ

主上の粗ちんぽ
絶対届かないとこ
やっぱ♥

ちんぽ





ほら♡
粗・ちん♡
シコってあげます♡

他の男に復ろから
ちんぽ突っ込まれて
よがってる妃の手で精子
無駄うちしてください♡

だせ♡



だっ♡

ほら早く
だせだせ
だせよ♡

負ける♡皮かぶり
ちんぽにオス
敗北刻み込め♡

粗ちん汁だせ
だせっ♡

キリ♡
キリ♡
キリ♡



ほっ♡けつ
ちんぽ♡まんこ
イクっ♡イツぐ♡

玉葉
なんて顔...



あはっ♡

すっごい
見てください

どうぞ♡
これ絶対今までで一番
濃いですよ♡主上♡



妃の寝取られ
メス豚顔で
敗北射精...♡
被虐性の変態♡
マゾちゃんほ♡

ふふ♡
良かったですね♡
本当の自分に気づけて♪



後は邪魔になり
そうなのやつも
こいつを使えば...

そうだな

しかしお前が
皇帝をこいつ
呼ばわりとはなw



んんん♡
私の真の主上は
貴方様だけ
ございます♡

こんな地位だけの
粗ちん男w
もう絶対無理♡

おんは
ちんぽ♡

んんん♡

んんん♡





い♡意地悪は
よくないかと♡♡

なに
可愛い猫には
いたずらしたくなる
ものだろ

さあ発情中の
スケベ猫は
何が欲しいのかな？



よし
欲しがりまんこ穴は
どこかな

にゃ♡
もうちよっと下♡
そこ♡そここれす♡



ちんぽ…
にゃ♡

ご主人様のデカおちんぽ
まんこに
ハメハメして
欲しいですにゃ♡



猫猫の様子が
変なのには
気づいていた
みたいだけど

私やこいつが
堕ちてるとは
思わなかった…
残念だったわね♡

後でご褒美♡

お♡





そうだよ
いいことを
教えてあげる

あんなドスケベ
まんこ顔してるけど
猫猫完全に
堕ちてないのよ♡

可愛い猫
おっぱいだ

ほっ♡

おっぱい♡



ご主人様に負けて
完全に身も心も
捧げたエロ牝豚の
私とは違って

まだ催眠が解ける
余地が残ってる♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡



はっ♡ぶっかけえ
特濃お薬精子
あつう♡

イッくっ♡



取り戻せたとしても
肝心のちんぽが
こう粗末じゃあね♡



ふふ♡
けど



あっ♡壬氏さま
いらしたんですね
この薬ちんぽ汁
すごいですよ♡

おほっ♡格が違う
オスちんぽ♡
おもっ♡

デカマラ
うまっ♡

薬屋……
まっつてる
必ず

玉葉さま
私もしゃぶります♡

猫猫は今しゃぶって
たでしょう♡
もう♡

つづく…

ご主人様のはかりごとく薄紫の肌が誘うヤクオチ
NTR〜

日高久志

その日、猫猫は退屈していた。

二千人もの女官が従事する後宮だが、中には商店がない。

多くの下級女官達は支給品のみで生活している。

妃の側にいる侍女や、実家が裕福な女官でなければ私服を手に入れる機会すらまならない。

そんな中で、時たまやってくる隊商（キャラバン）の一行に後宮はいつも色めきだっていた。

その分、後宮から呼ばれることもなく、下女の猫猫の仕事は激減する。

久しぶりに訪れた穏やかな日々。

新しい薬の效能を自分で試してみようか？と腕のさらしをなぞるほどだ。

前にその腕を見た王氏の嫌そうな顔が目には浮かび、猫猫は苦笑いした。

ふと静かに物思いにふけっていると、外が騒がしいことに気付く。

買い物を楽しんでいる女達の浮ついた笑い声でもない。

どこか恐々として、めわめわしていた。

（なんの…騒ぎだ…？）

猫猫は不穏な空気を感じ、自然と身体が動いた。大通りでは隊商の行列が馬車を牽いている。

（なるほど、原因はアシか。）

たしかにあの肌の色なら、驚くのも無理はない。入れ墨？肌に色素の沈着をさせることは難しくないけれど全身とは…。

何か特殊な薬でも使っているのだろうか？

背の高い帽子を被り、黒いマントを羽織った長身の馬に跨る男。

彼は顔から、指の先まで薄紫色の肌をしていた。太陽光に照らされて、金色の目がキラリと輝く。

異様すぎる出で立ちだ。

まるで悪魔のようなその男が喧騒の中心にいた。

猫猫は思わず騒ぎの中心に駆け寄り、群衆の中で目立たないようにそっと鼻を鳴らす。

行商人の身体の匂いをふと嗅いでみたくなったからだ。立ち込める匂いから、少しでも染料の正体が分かるかも知れない。

肌を削り取ってみたいが、そこまでは許されないことは猫猫でもわきまえている。

鼻を鳴らしながらふと上を見た猫猫は、男と目があってしまった。

男も群衆の中にも関わらず、男は猫猫だけを凝視していたのだ。長い口髭を釣り上げて、ニタアと厭らしい笑みで。

「げっ……」

思わず猫猫は後ずさる。

王氏が企み事をしている時のような怪しい笑みに、つい拒否反応が出てしまう。

「少女よ。私が珍しいのだろうか？

紫の肌をした人間など見たことがないだろうからね。

だが…これは染めたものではない。”生まれつき”なのだよ。

君の期待しているモノではない。

くくくっ…君のことは信徒子翠から聞き及んでいるよ。

これはささやかながら、君への贈り物だ。これが何か…？帰って確かめてみたまえ」

悪魔のような容姿をした男に、いきなり話しかけられ袋を突きつけられ猫猫は警戒した。

だが次の瞬間には懐から取り出した包みに入っていた”薬のようなもの”に目を奪われた。

「じ、これは…？」

「試してみるといい。死にはしない。とても気持ちよくなれるものだ」

男の肌よりも濃く紫色に輝く丸薬が「コロコロ」と猫猫の手の中で転がった。

—————

「……それで素直に受け取って帰ってきたと？
そんな得体のしれないものを？」

王氏は不機嫌そうに溜息をついた。
嫌味な軽口はいつも気に食わないが、今回はこの男の言う通りだ。

受け取るべきじゃない……
男は行商人。後々で対価を要求されないと限らない。

何より、この薬が中毒性のある麻薬の類かも知れない。
そうならば、お試して使ったとしてきっと後悔することになるだろう。

（だとしても精神力の問題だから、私なら切り抜けるかも知れない。
しかし中身をもう少し、把握してから……）

好奇心を抑えきれない猫猫だが、迷いを隠せない。
死なないと言っているのは、あの男だけだ。

本当は劇物の可能性も十分にある。
なにせ薄紫色の肌をした怪しげな外国人から買った薬なのだから。

（子翠のことを知っていたみたいだから、そっちら話を聞いてみるか……？）

不思議な丸薬を試さないでお蔵入りさせるという考えは猫猫にはない。

「やめておけよ……
もし使うつもりなら、取り上げる」

王氏が牽制するのは、想定内だ。
肯定も否定もしない。こういうのはほとぼりが冷めるまで寝かしておくのも一興だ。
その間に新しい情報があるかも知れない。

「だが会ったのなら、話が早い。
あの胡散臭い男が“天台烏薬”という薬を作り出せると言い出したのだ。
そんなものは……」

「不老不死をもたらすという“天台烏薬”をですか！」

王氏の話に食い気味に声を張り上げた猫猫は、目を輝かせた。

徐福という男が日本に作りに行ったとされる妙薬。
伝説上の薬を作れるというなら、是非に材料や調査の方法を知りたいと思ったからだ。

「だが薬を作用させるには、房中術を会得しなければならず、あの男の指南を受けねばと言いついたのだ。
そんなことがありえるのか？」

薬が効くかどうか……その……男女の交わりは関連があるのか……？」

柄にもなく顔を赤らめる王氏に白けながらも、ますます興味が湧く。
効き目をもたらすのに、性交が必要なんて聞いたことがない。

ただもしそうだとすると、皇帝は後宮で次々と孕ませるほどお盛んだ。
薬を呑むのに、条件として悩む必要はない。

「……王氏様……
宦官である自分の立ち位置を気にされているのですか？」

もし薬が本物で、不老不死になったら宦官でないことがバシる。
それを危惧しているのか？と勘繰ってしまう。

顔を引きつらせる王氏に、高順がすかさずサポートする。

「我々、宦官がなぜ必要なのかという話です。
主上のお側である後宮で、子種をばら撒かれることがあれば由々しき事態になりかねない」

（なるほど……二人はあの怪しい男が、後宮の妃達に手を出すと考えているのか。
“天台烏薬”はその為の仕込みだと……なんとも大胆だ。生きて帰れるとは思えないが……）

それにあの肌が生まれつきなら、子供の肌の色ですぐにバシそうなのに）

「それで……わたしに聞きたいのは、性交が薬の作用に関係するかということですね。」

……ないとは言えません。
血の巡りがよくなって、腹上死する者も少なくない
ですから。もちろん疑惑は拭きません……わたしに
それとなく調べると？」

「ええ。我々では判断しかねますから。
主上から仰せつかっております。
猫猫ならば信用できると。光栄なことです」

高順が平身低頭に頭を下げた。
立場的に猫猫に断ることは出来ない。

二つ返事で返そうとした猫猫は王氏に気を取られた。
尋常でない負のオーラを感じたからだ。

「くれぐれも…油断するな。
手を出されそうであれば…そうだな。とっておきの
毒を盛っても構わない」

「は、はい…」

さすがの猫猫でさえ、王氏の提案にはドン引きした。
だが嫌だと言えない雰囲気にもたじろぐ。
それほど危険な相手なのだろう。
猫猫に普段と違う緊張がはしった……

—————

(あの男の名はデ・カマラ。
西方の神を祀る神父とやらで、薄紫色の肌に禍々し
い入れ墨を施している…)

男とは滅多に口を聞かず、女性をいつも口説いてば

かり。

貢物を欠かさず、下女にまで高価な織物などをばら
撒いている。この風説なら、たしかに警戒もしたく
なるか…)

後宮で情報収集に勤んでいた猫猫は、男の怪しさ
に顎を撫でながら感心していた。

今すぐにも出禁になってもおかしくない立ち回り
をしている。

それなのに留め置かれているのは、不老不死の薬の
可否がやはり重要なのだろう。

皇帝が不老不死になれば、煩わしいお世継ぎ問題か
ら開放される。

(そうになったら、後宮もお役御免で…
わたしも失業してしまうのでは…?)

と下世話なことを考えながら、猫猫は小さな階段に
腰を落ち着ける。

「ねえ、猫猫♪カマラ様のことをあちこち
尋ね回ってるって本当？」

不意に後から小蘭がひとなつこく飛びついてきた。
首に掛けているのだろう装飾品が肩に刺さって痛い。

「ちょうどよかった。
何か知ってるなら、教えてほしい。
お返しも用意してるから。ほら…」

猫猫は周到に用意した、小蘭の好物のお菓子を肩越

しに見せた。

嗜好きで情報通の小蘭の話は、お菓子の対価に見合
うに違いない。

「そんなのいらないよ。もっと美味しいのお…♪舐
めてるからあ♪」

小蘭は前に回ると、屈託のない笑顔で笑った。
舌を出し、紫色の飴を見せつける。
唾液で濡れた飴は怪しく光って舌の上を転がってい
た。

「!?!?…それって……」

見覚えがある。

カマラがくれたあの丸薬だ。
小蘭は見せつけるようにシロシロと舌で飴を弄ぶ。

「この飴はねえ…ふふっ♪」

カマラ様の尊い精液から出来てるんだあっ♪
だからあ……んんっ♪舐めてるだけでえ…

カマラ様のぶっといオチンポ様をおしゃぶりしてる
気分になれるのっ♪」

ウツトリと頬を赤らめる小蘭に、猫猫はたじろいだ。

(あの男っ……!)

後宮の下女に手を出したのか!

それがどれだけ危うい事態なのか、きつとカマラは
分かっていない。発覚すれば小蘭を巻き込んで揃っ
て誅殺されかねない。

(馬鹿なことを…
精液の味は…知らないが…
こんなに心躍るものなのだろうか…?)

焦る気持ちと裏腹に好奇心も沸いてしまうのが、猫
猫の罪作りなところだ。
小蘭はそんな猫猫の隙を見逃さなかった。

「そんなに気になるなら…
猫猫にも味あわせてあげるっ♪」

「っ！？」

不意打ちだった。

唇を奪われて、猫猫は狼狽した。

しかも驚いて閉ざそうとする口を、小蘭の舌がこじ
開けてくる。

「はうっ……んむうっ……っ！！」

又ル又ルとした嫌な感触と共に、飴玉が口の中に押し
付けられた。

広がる甘い香りと共に、身体が瞬間的に火照ってい
く。

「ううっ……！くうっ……っ！！」

効き目が早すぎる。

すぐに吐き出さないといけないと本能が叫んでいた。

でも一度舐めるともうだめだ。

猫猫は自分の意思に反して、舌で転がして味を愉し
んでしまっていた。

(なんだっ……これっ……!?
濃厚で言いようのない……んくうっ♪
身体の奥から……ああっ!!)

これが麻薬の類なのは分かった。
この丸薬は強烈な催淫作用があるのだ。

猫猫は生娘だが、媚薬を試したことはある。

やりて婆が隠し持っていた物をこっそり拝借したの
だ。同じように火照って、初めての自慰を経験した
のはいい思い出。だからこそ、この作用が媚薬だと
分かる。

「あうっ……！くはっ……!!！」

やっとのことで口を開け、吐き出そうとする猫猫は
驚愕して固まってしまった。

目の前にいた小蘭の舌が…人間とは思えないほど長
い舌が顔を舐めてきたからだ。

「なっ……」

「どうしたのお、猫猫？」

あはははっ♪私の“本当の姿”を見て驚いてるんだ
♪その飴には…舐めている間は人間の姿に見せられ
る効果もあるんだ♪

凄いでしょ？カマラ様が与えてくれる全てが…素晴
らしいのっ♪」

長い舌だけじゃない。

小蘭の肌はカマラと同じ薄紫色に染まっていた。

「カマラ様と同じ肌の色♪」

人間を辞めて、妖怪になった証いっ♪
そうなの。私や子翠はカマラ様の眷属になって、人
間じゃなくなったのお♪」

「あっ……ああ……」

迫る影。

邪悪な笑みを浮かべる子翠がそこにいた。

二人に囲まれて、猫猫は自分が畏にかかったのだと
知る。

(ま…まずい……!!)

このままでは私まで……!!)

藪をつついて蛇を出した。

カマラの企みがここまで後宮を侵食しているなんて、
考えもしなかった。

逃げ出そうともがいて後ずさる猫猫の前にもうひと
っ、大きな影が落ちた。

「逃しはしない、お嬢さん。」

君も我が信徒となり、服従してもらおう。

私の手駒として、この国を染め上げるのだ。

もちろん、対価は支払おう。最高の快樂だ」

「うっ……!!！」

カマラは猫猫の襟口に手をかけると、力いっぱい
引き裂いた。人通りが少ない場所とはいえ、まだ昼
間の外で襲われる…

カマラがいくら大胆とはいえ、普通に自殺行為だ。

(わたしが叫び声一つ、あげるだけでっ……！)

小蘭達がどうなるか心配だが、この際遠慮していられない。猫猫が大きく息を吸い込んだ瞬間、カマラが覆いかぶさってきた。

「あぐうっ……！んんむうっ……！んんむうっ……！んんむう……！んんむう……！んんむう……！」

唇を無理やりに奪われ、舌を挿れられた。それだけじゃない。はだけた胸を乱暴に揉みしだく。

人間離れた力に猫猫は身動きがとれなかった。

突っ込まれた舌を押し返そうとしても、歯を立ててもビクともしない。

ただただ蹂躪されてしまっていた。

「猫猫ったら、無駄な足掻きをして〜」

カマラ様を受け入れたら、すぐに幸せになれるのにつつ」

「そうよ、猫猫♪見守っていてあげるから……存分に味わってね♪」

子翠が優しく頬を撫でてくる。

彼女もコロコロと舌先で飴を転がしていた。

「美味いぞおっ……！くくくっ……！」

お前の唾液は甘く色気がある。

なんだ！奥手でまったく興味がないのかと思えば、とんだムツリスケベじゃないかあ〜っ」

長い舌をニユルニユルと挿れながら、カマラが笑う。

(この……化け物……！駄目だっ……！好き勝手にされたままじゃっ……！)

声も出せない。

抵抗をするにも振りほどく力がない。

でも諦めてされるがままにされる訳にはいかない。

猫猫は涙目になりながらカマラをキッと睨みつけた。

希望を失わず観察すれば、薄紫色の肌をしたこの化け物にも人間と同じような隙があるはずだ。

だがカマラは全てお見通しのように微笑んだ。

「この状況で悠長なことだ。

私を出し抜こうと考えているな……気高く愚かしい。

だがそれがいい。そんなお前を私の信徒に墮落させるのは……実に心地が良い」

「もう手遅れなんだから……愉しまないと損だよ♪猫猫♪」

子翠と小蘭がカマラのスポンを丁寧に脱がし始める。

露わになったカマラの陰茎は、王氏の“蛙”とは比べ物にならないグロテスクなサイズをしていた。そして亀頭の先まで、肌と同じ薄紫色をしている。

「私に抱かれれば最後。

お前は私の虜となる。この牝妖怪達と同じようにな！」

「そんなこと……！……！」

んひいっ……！うぐうっ……！……！」

あまりに突然だった。カマラは腰を引いて一気に突っ込んだ。

雄々しくて逞しいイチモツが、猫猫の華奢な身体を容赦なく蹂躪したのだ。

破瓜の恐怖と痛みで、猫猫はくぐもっていないながらも

精一杯叫ぶ。

陵辱されている……無理やりに犯された身体がどうなるか……

花街で育ったことを差し引いても、猫猫には容易に想像が出来た。

パンパン……！パンパン……！……！

命でさえ危うい状況だ。

カマラは猫猫がどうなろうと構わないとでも言うように、腰を振る。

貞操なんて生易しいものを気にしている場合じゃない。

「うむうっ……！んんむう……！……！」

あうっん……！ぐううっ……！」

それなのに……

それなのにだ。

身体は心とは裏腹に、しっかりとカマラのレイプを受け入れていた。

さすがに猫猫にも理解できない。

濡れそぼった膣穴が、大きく広がって一生懸命にカマラを迎え入れている。

(これが…女の身体の反応…？
男に抱かれると…こう…なるのか…？)

生娘らしい感想に翻弄されながら、猫猫は目を白黒とさせていた。
だが口の中でのカマラに押し付けられる異物に、意識を取り戻す。

(しまった…飴玉だ！)

染み出した媚薬の効果で、身体がおかしくなっているんだ！
あうううっ…このまま好きにされたら…)

「ねえねえ、猫猫？」

カマラ様のオチンポ様が気持ちよく受け入れられたのは…
飴玉のせいだけじゃないよ♪」

小蘭がまた見透かしたようにケラケラと笑う。

「丸薬はカマラ様の精液から出来ていて、それは私達牝豚にとっては媚薬になるの。」

でもお…本当は精液だけじゃない…

カマラ様の体液全てが…うふふっ♪私達を昂ぶらせるんだあ♪

唾液だって……ふふふっ♪」

子翠が自分の唇を思い出を反芻するようにウツトリしながら、舐めあげている。

(…？…だ、唾液！？そんなっ…！…あああ
っ…！…、こんなんっ…！…！)

思考がかき乱される。

きつと正解は大声を上げるチャンスを待ったに
違いない。
それしか手がない。

だが身体に入れてはいけない毒の体液…カマラの溢れる唾液が容赦なく注ぎ込まれ喉を鳴らす。

ゴクッ…ゴクゴクッ…

声を上げる間もなければ、毒を吐き出す余裕もない。
心を惑わす毒の怖さを人一倍知っている猫猫にとって、犯されていることよりも地獄だった。

「心地よいぞ、猫猫！」

締めがいいのに、こんなに濡れそぼって…
淫乱牝め。お前が人間を辞めるときが愉しみだ…！」

カマラが猫猫の頭を撫でた。
優しい手付きに違和感すら覚える。

(人間を…小蘭たちみたいに…？)

猫猫は自分の想像力が恨めしくなる。

薄紫色の肌をした怪物になった自分が脳裏に浮かぶ。

蠱惑的で…

背徳的な…

『お前には似合わんぞ、そんな姿』

猫猫はハッとした。

なぜそこで王氏の困った顔が浮かぶのかは分からない

かった。

でも自分らしくない…そう素直に思えた。

(この男の…思い通りになど…なってるものか
っ！)

声にならない叫びが眼光になって、カマラに突き刺さる。

だがカマラはまったく意に返さなかった。

「お前は自分を特別だと思っているな。」

他とは違うと。お前のような小娘を私が今まで墮としてこなかったと思っっているのか？

王女や女騎士…もっと高貴で凛々しい牝を墮落させてきた。

お前ごときが凄んだところで、無駄なのだ。
くくくっ！出るぞっ！…私の神聖な精液が…お前の
膣で暴れるぞっ！…！」

「あむうっ…！…うぐうっ…！…んっ！」

身体が引きちぎれそうなぐらいに、カマラを押し
けようと猫猫は踏ん張った。

その時だった。

カマラのイチモツが大きく震えたと同時に、お腹の
中に濁流が一気に流し込まれたのは。

ドピュルウウツ…！…ドドドブウ…！…

「ひひゃうううっ…！あうっ…！おおおっ」

押し寄せる快樂に、仰け反り白目を向くしかない

猫猫は無力だった。ただただ蹂躪されてしまった。

「ああ……」

力が抜けて、放心状態で地面にへたり込む。

「これで猫猫も私たちと一緒にだね♪
明日…手習い所に来て、カマラ様に牝豚としての作法を学ぼう♪約束だよ♪」

息も絶え絶えの猫猫に、小蘭は可愛く指切りをして微笑んだ。

—————

その夜…

猫猫はどうやって自分の部屋に帰ってきたのか、定かではなかった。
カマラに犯されてから気を失っていたからだ。

（ここには運びこまれた…？

カマラ達が…？それはそうか。
あのまま放置すれば、事は大きくなる…）

不意に自分の身体からカマラの精液の匂いが香る。
今日の出来事は夢じゃない。
お腹の中で熱いものが蠢いた。

（これは…！
か…掻き出さなくては…
妊娠してしまったら…）

あれからどれだけ時間が経っているのかはわからない。

だがそのまま放置していることも出来なかった。
猫猫は桶を用意するとそれに跨って力んだ。

「んんっ…で、出そうっ…」

えっ？んんっ…？おおっ…！おおっ…！

猫猫の予想よりも多い凄まじい量の精液がドパドパツと桶に放たれていく。
部屋中にムワツツと精液の匂いが漂った。

「おおっっすこお……
出しただけなのに……♪こんなあっ……♪」

猫猫は涎を垂らしながら仰け反る。
ビクビクと身体を震わせて、余韻に浸る。

そしてしばらくしてから、桶に目をやった。
桶の中には波々と溜まった白濁液が湯気をあげている。

ゴクッ……

猫猫は汚らしいその精液溜まりに喉を鳴らした。
その味は知っている。

そして媚薬としての気持ちよさも。

コロッ……♪

口の中で、飴玉が転がった。

小蘭から口移しで渡された飴がまだあったのだ。

だが時間が経っているからか、もうかなり小さくなっている。

（このままじゃ…なくなってしまう…
ほ、補充しないと…）

貰った飴玉がこの部屋にはまだある。

それなのに、猫猫は床に這いつくばると桶に舌を伸ばした。

ピチャピチャツ……♪

本当の猫がミルクを舐めるように、精液を舌で舐め取っていく。

（この濃厚なあ…んんっっ♪
身体がまたあ…熱くなってる♪
ずっと舐めていられるう…美味いっ♪）

猫猫はそんな変態行為に何の抵抗もなくなっていた。
生尻をフリフリしながら、ずっとずっと音を立てて舐めている。

それほどに精液は美味で、中毒性があった…

—————

（まさか…あのまま寝落ちしてしまうなんて…
誰も来なくてよかった。
末代まで笑い草になるところだった…）

猫猫は頭を抱えながら、路地を歩く。
桶の中の精液がなくなるまで、名残惜しそうに舐めた後の記憶がない。
桶に顔を突っ込むようにして、眠ってしまった。

猫猫は手習い所の前まで来て、立ちすくんだ。

小蘭が誘ったときにカマラがここに居る事は分かっている。

中に入ってしまったら、きっと碌なことにならない。分かっているが期待に胸が高鳴りドキドキしてしまう。

(…今はわたし自身がハマッてしまっている…
どんな毒よりも甘美で誘惑が激しい…だ、だからこの件は王氏達に任せざるべきなんだ)

自分に言い聞かせるように、扉にかけた手を引く。その場を離れようと後ずさる。

「何をしているの？」

「…！」

後ろにいたのは、玉葉妃の侍女頭でもある紅娘だった。彼女の方がここへ来るのは不自然だ。

読み書きのしっかり出来る彼女が手習い所に来る要件がない。

「ああ、この匂い……」

小猫も私と同じなのね♪

予習を欠かさないなんて…さすが小猫。

一緒に入りましょう♪」

「っ！？」

紅娘は悪戯に舌を出し、そこに載せた飴玉を見せつける。猫猫はカリッと同じ飴玉を思わず噛んでしまった。

小蘭から買った分はなくなったが、幸い部屋にはス

トックが沢山あった。

隊商の行列でカマラから直接もらった丸薬だ。

それを猫猫は自分から口に含んで来てしまったのだ。紅娘が自分の舌から飴玉を掌に滑り込ませた。

たちまち身体が薄紫色の肌へと変貌していく。

「なっ……！？」

カマラの侵略は、すでに後宮の中にまで及んでいた。このままでは玉葉妃でさえ危うい。

「入ります、カマラ様♪

今日も私の世界の全てをお教え下さいませっ♪
ふふふっ♪」

驚愕する猫猫をよそに、紅娘が手習い所の扉を開け放つ。中には教壇に立つカマラ。

そして十数人の同じ肌の色をした妖怪娘達が行儀よく座っていた。

だがその格好は、侍女達が着る服ではない。

乳首やお尻、秘部が隠されていない…黒い紐のような靈感的な服を着ている。

「よく来ましたね、紅娘。

そして…猫猫。お座りなさい。席を用意してあります」

カマラが優しく声をかけてくれる。だが彼も彼ですらに全裸だった。薄紫色の肌と勃起した巨大な陰茎に目を奪われた。

「猫猫っ！早く座って♪私の隣だよ♪」

もはや見る影もない小蘭が、以前と同じ屈託のない笑顔で手招きしてくれた。

猫猫は抵抗も出来ず、ただ誘われるまま席についた。

「では皆さん。皆さんの信仰の成果を…私に教えてくださいませんか？」

小蘭たち妖怪娘達が我先にと手をあげた。当てられた彼女達は口々に恐ろしいことを口走る。

「喉の病で苦しむ侍女たちに支給されている薄荷飴を、カマラ様の精液飴とすり替えておきましたあ♪
これで知らない間に、中毒になっちゃう子が続出るはずですよっ♪」

「柘榴宮の中に、カマラ様がお住まい出来る場所を作っています♪

カマラ様に相応しい豪華で素敵なヤリ部屋にしてみせますっ♪」

「私の部下である侍女達も、明日にでもお捧げできると思います♪
そうなれば…カマラ様のお望みのままに…

玉葉妃に自らカマラ様へ屈服するように促すことが出来るようになります♪」

王氏が聞いたなら、その場でカマラを斬り殺してしまいたいような企みの数々。
それを小蘭達が嬉々として笑いながら発表している。

「貴方はどうですか？猫猫。
何か私に伝えるべきことがありますか？」

名指しされた猫猫は戸惑うしかない。
何も無い。瞳いっぱいに出された精液を桶で受けて
舐め取ったくらいしかしていない。

「では小蘭、子翠、紅娘。

特に信心深かった三人にはご褒美をあげましょう。
私のモノから、大好物を搾り取りなさい」

小蘭達は「はいっ♪カマラ様♪」と声を揃えるとカ
マラの足元に傳いた。

それぞれに長い舌をチュルリ♪と出しながら、カマ
ラのイチモツに貪りつく。

「いいですね。新鮮な精液は貴方達にとって最高の
ご褒美。

よく分かっている……それに中々の舌触り。心地よ
いですよ」

カマラはニンマリと満足げに笑う。

股ぐらに吸い付く3人が、それぞれに激しくピチャ
ピチャと水音を立ててしゃぶりあげている。

（“新鮮な精液”……！？）

猫猫は3人が羨ましくてたまらなかった。

そうだ。カマラの美味しい中毒精液をプリプリの生
で買ったことがない。

飴も、桶の精液も…時間が経っている。
本当の“美味しさ”をまだ味わっていない…

「あ…ああ……っ♪」

身体がまた火照ってくる。乳首が立って、自然と股
下に指が滑り込んでしまう。

自分が物欲しげな視線を向けていることが、カマラ
にも分かっているのだろう。

見下すように目を細めると、手招きをした。

「猫猫。お前にも精液を舐め取るに値する働きがあ
るでしょう。

それを宣言し、この信徒の輪に加わりなさい」

「はうっ…♪わ、わたしも舐めて……」

猫猫は何を言えはいいのかわからない。

カマラが喜ぶような事は何も…3人がやったように
…後宮を陥れるような工作をした訳でもない。

普段答えに迷うことなどない猫猫はグルグルと焦っ
て冷や汗をかく。

（なにが…なにがある？

王氏に報告せずここに来た？
それだけじゃ弱い…問い詰められれば白状するしか
ない。

嘘をつく…？いや、それは見破られる…）

王氏は切れ者だ。

裏をかくには真実が必要になる。
そんな準備はまだ何も出来ていない…

準備…？

「そういうこと…か…

あはっ♪だから…“宣言”と…」

猫猫は顔を上げ、立ち上がった。

そしてカマラの前に歩み寄る。
カマラの思惑がやっと分かった。

自分の出来ること…するべきことがハッキリと。

「カ、カマラ様…

わたしは王氏より、カマラ様のご提案された房中術
を妃様達に教える件の成否を調査するように申し付
けられています。

あの男に信頼されている…わ、わたしなら！

カマラ様の邪魔になるあの男を手玉に取ることが…
いいえっ！取ってみせますっ！だ、だから…

わたしにも生精液をくださいっ！おしゃぶりさせて
くださいっ…！！！！」

自分がぎれる精一杯の切り札だった。

カマラの役に立てることはこれくらいしかない。
だがカマラは冷徹だった。

「それでは不十分です。
おしゃぶりは許可出来ませんね」

「ううっ……」

猫猫は絶望に打ちひしがれるように、顔を曇らせた。

カラカラに乾いた喉は貪欲に精液を飲みたがってい
る。

それが一生叶わないかも知れないのだ。

カマラは満足げにまた微笑むと、猫猫の頭を撫でる。

「いつまで人間風情にこだわっているのです
我が淫紋を受け取り、妖怪変化致しなさい。」

「この子達のように長舌奉仕に勤しむのです」

（あつ…そうだ…！そんな大切なこと…思いつか
ないなんて…皆と同じじゃないと…カマラ様を満足
させられないっ！）

「カマラ様！人間を辞めるなんて…どうしたらいい
か…お願いしますっ！…教えてくださいっ！…
今すぐ、人間を辞めたいですっ♪」

猫猫は明るく笑顔を取り戻しながら、カマラにすり
寄った。

「では簡単なことです。お腹をだしなさい。お前の
子宮に私の眷属である印を刻んであげましょう。
そうすればもう後戻りは出来ない。
お前は妖怪となり、私のものとなる」

「はいっ♪カマラ様っ！…」

猫猫は躊躇しなかった。着物をはだけさせつま先立
ちしながら、お腹をカマラに突き出す。カマラは長
い悪魔のような爪先を猫猫の下腹部に当てた。

「精液タンクとなり、我が手足として働くがいい。
信徒猫猫よ」

「ひゃあっ…！んんっ…！…！…！
んひひひひっ…！おこれえええっ…！…！」

紅く輝いた淫紋が猫猫の身体を徐々に染め上げてい
く。猫猫は愛液を吹き出しながら、快楽に顔を歪め
た。

「気持ちいいいいいいっ♪
変わっていくのお…！たまらないいいっ♪
あはあ…！だめええっ♪」

薄紫色の肌になっていく自分の指。
最悪な状況のはずなのに、猫猫は恍惚としていた。

「きひひっ♪
だってえ…！これで…！
新鮮なプリプリ精液が頂けるものおっ♪」

らしくない邪悪な笑顔を浮かべ、猫猫の妖怪転生は
完了した。長く延びた舌でシユルシユルと物欲しげ
に唇を舐める。

「堪え性のない子だ。
いいですよ。お前も加わりなさい」

「はいっ♪カマラ様…！
小蘭っ！オチンポ様を譲ってよおっ♪」

小蘭達を押しつけるように、猫猫がイチモツにしゃ
ぶりつく。

「仕方ないなあ…！最初だから譲ってあげる♪じゃ
あ…わたしはタマタマ担当でっ♪」

「うじゆるううっ♪
しゅいおっ♪うむううっ…！…！…！
大きいしい…！すすい匂いっ♪」

猫猫の整った小さな顔が歪むほどに頬張って舌を絡
める。

まだ舐め始めたばかりなのに、アへ顔を浮かべてい
た。

「本当に猫猫って淫乱だよね♪
んんっ…！カマラ様のものになるのが一番の幸せ
だっ…！やっと気付いたと思ったら、こんなに激し
くっ♪」

「あむうむうっ…！レロレロおっ♪んんっ…！
美味しいいっ♪
美味しすぎますっ…！カマラ様あ♪」

子翠に嘲られても、おかまいなしに激しく顔を上下
させる猫猫。
その姿に紅娘も感心していた。

「いいわあ、普段の澄まし顔が台無しい♪
レロオっ♪玉葉妃にもさせてあげたいわあ♪
そんな酷いしゃぶり顔♪」

「精液い…！うじゆるううっ♪
くださいいっ、新鮮な精液をおおっ…！
んんっ♪ううっ♪」

猫猫の激しいフェラ奉仕にカマラも昂ぶってきてい
た。それに賢く聡明な女を、ただの精液狂いに墮と
し、人間まで辞めさせるこの瞬間。

何度味わっても愉悦極まりない。



あとがき

薬屋のひ〇りごと本！読んで頂きありがとうございます！！
薬屋、本当に面白い作品で、さらに女性陣がエッチで良き(*^^*)

今年は春の同人誌、引っ越しなどで忙しく迷ったんですが、
何とかやれそうということで、出すことにしました！！
手に取ってもらった方に楽しんでもらえる内容になっていたら
いいなと思うばかり><

そしていつもより少し短めですが、一応続くという形で
他の上級妃などなどは次回作でやってみたいなど！
来年、もしくは再来年？何にしてもしっかり
完結はさせたいです！！

夏コミもありますし、今年もまだまだ頑張っていきたいと
思いますので、またどうぞよろしくお願ひします

さなつき

日高さんめちゃくちゃエロいの
本当にありがとうございました～！！

奥付け

- 発行・著者 さなつき
- サークル アヘアジフ
- Email neko998-aheaji@yahoo.co.jp
- Pixiv 41042507
- Twitter @sanatuki0510
- 印刷 ねこのしっぽ様
- 発行 2024/5/28

ご主人様のはかりごと～薄紫の肌が誘うヤクオチNTR～

- 著者 日高久志
- pixiv <http://pixiv.net/users/4853918>
- ノクターン <http://xmypage.syosetu.com/x8371q/>

**制作
アヘアジフ**

**この作品は
二次創作であり
原作とは一切関係ありません**

複製を禁止する